

葬祭史関係文献・鈴木勇太郎著『回顧録』など*

井上章一**

近年、さまざまな分野で、死に関する研究が目立つようになってきた。歴史研究・人類学などで、数々の業績が報告されている。昭和58年には、「葬祭学」の構築すら提唱されるに至った。⁽¹⁾

産業技術史研究においても、葬祭は十分テーマになりうるだろう。たとえば、葬儀社の経営形態の変遷をたどること、あるいは、死を扱うさまざまな技術の変容も、追跡しうると思われる。

そこで、ここでは、近代日本における葬祭史関係の文献を紹介することとした。

まず、なんといっても基本文献となるのは、葬儀社の資料である。この種のものとしては、東京博善社が出した『東京博善株式会社五十年史』が最も古い(昭和46年発行)。なお、博善社は、東京・神田にある火葬場を営む会社である。

周知のように、日本は、火葬の普及率が大変高い。いわゆる先進諸国の中では、群を抜いている。しかし、江戸時代だと、おそらく都市部でもその普及率は低かっただろう。火葬は近代以降、急速に発展してきた埋葬形態だといえる。

博善社の社史は、この間の経緯を伝える数

少ないデータのの一つである。特に、大正10年創業以降のデータは、注目に値する。のみならず、江戸時代以降の火葬場に関しても、手際よく調べられている。火葬という死体焼却の技術史を調べる上では、必読の文献だといえよう。

続いて、名古屋の一柳葬具総本店が出版した社史も、紹介しておきたい。『一柳葬具総本店創業百年史』である。同書は、600ページに余る大冊であり、図版なども多数収録されている。風俗史の書物としても、格好の読み物となっている。事実、同書の出版は、マスコミでもかなり取り上げられていた(『名古屋タイムス』昭和52年1月12日、『中日新聞』昭和52年4月12日など)。

この本で注目すべきは、第三編「写真でつづる葬儀の記録」である。ここには、大正10年以降の葬式風景が写真で記録されている。弔いの変容が具体的に読み取れ、興味深い。また、明治時代の葬具類を収録した部分も一見に値する。

もっとも、同書の記述にはミステークと思われる部分も多く、そのままでは必ずしも信用することはできない。利用にあたっては、細心の注意が必要となろう。

* 1985年6月22日受理

** 京都大学人文科学研究所

(1) 浅香勝輔・八木沢壮一『火葬場』大明堂、昭和58年。

次に、助葬会の記録をあげておく。『助葬会六十年史』である（昭和54年刊行）。助葬会は、大正7年に発足した社会福祉法人。都市貧民たちの葬送を無料で行なう機関である。

大正時代からの貧民の動向、それに対応する福祉のあり方などが、葬祭の中に描き出されている。都市史・生活史の記録としても興味深い。

社史としては最後に、大阪の公益社ものを紹介しておこう。『葬祭五十年・株式会社公益社の歩み』である（昭和57年刊行）。公益社は、大阪の代表的な葬儀会社。創業以来、合理的な経営をうたい文句に業績をあげてきた。昭和初期において、葬祭産業の経営形態に一大革新をもたらした会社である。同社の社史も、経営史の一コマとして注目に値する。

かつて大阪には、駕友という葬儀社があった。大阪で最大の規模を誇った会社である。現在は、大阪公益社に吸収合併されている。公益社成立以前の葬祭業の実態を知るためには、駕友の記録が必要となるが、これがなかなか見当たらなかった。『上方』昭和13年12月号に駕友の社長鈴木勇太郎へのインタビュー記事がのせられている。従来は、これが唯一の記録であった。

ところが今回、幸いに大阪公益社の御好意により、この鈴木勇太郎の自叙伝を見ることができた。昭和11年に発行された『回顧録』である。これにより、明治期葬祭業の実態がヴィヴィッドに読み取れるようになった。

たとえば、従来、火葬史の分野で不明の点が多いとされていた「八弘社」の様子も、これにより明らかにされている。その他、霊柩車の導入、葬儀にかかる税制の問題などが読み取れる。葬祭史の叙述にあたっては、何をおいても目を通すべき文献である。以下にその目次を引用しておく。

我が店の略歴
八弘社の由来

明治十五年私の初仕事と脱出
同十六年葬具会社の躍起運動
同二十八年八弘社と葬具会社の提携に葬儀所の目論見
同廿四年葬具貨物業組合の設立
同廿七八年株の儲と当時の心境
同三十年大仁葬儀所の経営
同卅一年永続合資会社の設立
同卅二年青竹と白木飾の嚆矢
同卅五年八弘社の拍子木
同卅九年父の死去
同卅九年葬儀会社の解散と買取
同四十年市役所と私との争ひと大阪朝日新聞の記事
同四十年駕税の歎願書
同四十年私の不動産と株券
同四十二年天満の大火と保険会社
同四十五年世界の大損失と諒闇
大正元年と三年伏見桃山御陵へ参勤
大正元年私産の処分
同三年密葬の不可論
同三年昭憲皇太后崩御
同三年母の怪俄
同三年葬具組合の更正
同四年鴈風楼の総会と霊柩車
同四年島家の御葬儀と禘
同五年自動車部開業と我国最初の柩車
同七年霊柩車と米騒動
同八年霊柩車の繁用と参考書
同九年京都市と霊柩車
同十一年飾附市営と報労金の猫糞
同十三年母の死去
同十五年大正天皇崩御
昭和二年葬儀組合の創立
同三年組合の記念総会
三年公認組合と役員及総人員
同三と四年葬儀部店員へ表彰状二通
同四年典礼株式会社の目論見
同六年典礼商事組合の設立
同六年自動車部へ表彰状三通

同六年自動車従業員へ感謝状
同七と八年典礼商事の無邪気な会議と解散
同七年自動車部へ感謝状
同八年同盟組合の設立
同九年自動車部へ感謝状
大阪市立各葬儀所の開業期日
営業上私の固守せし十五ヶ条
私の所感
旧と新と混合の行列
囃子車の徘徊
ちんどん屋式と魚釣屋式つ葬具屋
公私葬儀所と葬具会社の解散及各柩車屋の
廃業

明治年代の駕屋と七ヶ年間の火葬統計
大阪市役所発表の昭和八年中の死亡数と出生数
大阪府下の神社と仏閣(大阪日々新聞の記事)
一公園墓地の設備(大阪朝日新聞の所載)
なお、駕反は、もともとは、葬儀屋を営んでいたわけではない。江戸時代には、「幕府各藩の参勤交代及日々登城の五老中、若年寄等の人足を取扱い元締業に従事」していた。それが、幕府の瓦解により職を失ない、葬祭業に転業したのである。明治時代の葬送行列に大名行列風のスタイルが採用されているのもそのためである。